

(特選)

☆煤匂ふ広き座敷や古雛

繁好

囲炉裏のある古民家、ときどき煤払いもされている。座敷は広々としてをり、床の間には先祖代々継承されてきた雛段が飾られている。写生の眼が行き届いた秀句である。

・観梅やもつれし足のもどかしさ かつを

梅見のために一万歩近く歩いたためか、足が疲れてもどかしい。体験したことを素直に詠み止めてをり、読み手に共感される秀句。もつれし足と、もどかしさの措辞で「も」と「も」にリズムあり。

・雨風の記憶を幹に臥竜梅

進

長い年月を経て臥竜梅の幹は、雨風に打たれて色々と模様が出来ている。「雨風の記憶を」が言いえて妙であり、優れた措辞となっている。臥竜梅の姿が目には浮かぶ。

(入選)

- ・春寒や群れて実習庭師の子 けんじ
- ・うららかや三溪園の沢の音 邦夫
- ・武士の愛でし茶室や臥竜梅 繁好
- ・のどけしや鳥に餌をやる老夫婦 忠男
- ・梅が香や空には鳶の声頻り 忠男

(佳作)

- ・杖突きてのたうち回る臥竜梅 けんじ
- ・梅の香や欄間の隅の隠し傘 よしまさ
- ・梅匂ふ合掌造り煙立て 一江
- ・日差し受けかすかに香る臥竜梅 清
- ・梅香る臨春閣の亭しゃ橋 よしまさ
- ・うららかや野良猫庭を闊歩して 忠男
- ・水仙花一群ごとに揺れてをり かつを
- ・庭園に下馬の碑紅椿 進